

岩崎行親の生涯と札幌農学校(1)

—ある国粹主義者の札幌農学校教育に対する受容と抵抗—

三 浦 嘉 久

Yukichika Iwasaki: The Life and Sapporo Agricultural College(1)

Yoshihisa Miura

司馬遼太郎『坂の上の雲』は、「坂の上」に浮かんだ「雲」をみつめて坂をのぼってゆく秋山好古（1859-1930）、真之（1868-1918）兄弟と正岡子規（1867-1902）という若者たちの青春群像の物語である。

岩崎行親（1857-1928）、内村鑑三（1861-1930）、宮部金吾（1860-1951）、新渡戸稲造（1862-1933）らもこのような若者たちであった。

この二つのグループの年齢層は秋山好古、岩崎行親、内村鑑三、宮部金吾および新渡戸稲造がほぼ同年代で、秋山真之と正岡子規が同年代になる。彼らは明治青年として一つの世代に属すると言ってよいだろう。彼らには共通するものがあり、それは明治のナショナリズムであった。

本稿は、岩崎行親および彼の友人たちがそれぞれの「雲」を見付けて共に坂を上りつつ峠近くまで来た歩みを記述するものである。

Key Words: [岩崎行親] [内村鑑三] [スコット] [尊皇] [明治維新]

(Received November 21, 2011)

1 はじめに

岩崎行親（以下岩崎と表記する）は、良質の日本主義・国粹主義に満たされた国士、すなわち、「国家にとって有用な人物。また、自分の身をかえりみないで、国事に尽くす人」であり、国士的な教育者であった。往時、わが国の、また鹿児島の当時の時代的な要求に応じて大きな存在感を發揮したキーパーソンであった。

岩崎は札幌農学校に第2期生として入学し4年間の学生時代を送るが、キリスト教徒が多数派であった第1期生および第2期生の中であって少数派の非キリスト教徒として卒業した。

この学生時代は岩崎にとって何であったか。本稿は岩崎が札幌農学校でどのような学生生活を送り、札幌農学校教育が人間形成にどんな影響を及ぼしたか、別言すれば札幌農学校教育に対する受容と抵抗を明らかにすることを試みるものである。

*鹿児島純心女子短期大学副学長（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

2 論文の構成

本論文は、はじめに、第1節 札幌農学校入学まで、第2節 札幌農学校時代、むすびから構成される。

本稿はその第1節である。

なお、年齢は数え年である。また、旧漢字は原則として新漢字で表記した。

第1節 札幌農学校入学まで

1 問題の所在

司馬遼太郎『坂の上の雲』は、「坂の上」に浮かんだ「雲」をみつめて坂をのぼってゆく秋山好古(1859-1930)、真之(1868-1918)兄弟と正岡子規(1867-1902)という若者たちの青春群像の物語である。岩崎(1857-1928)、内村鑑三(1861-1930)、宮部金吾(1860-1951)、新渡戸稲造(1862-1933)らもこのような若者たちであった。

この二つのグループの年齢層は秋山好古、岩崎、内村鑑三、宮部金吾および新渡戸稲造がほぼ同年代で、秋山真之と正岡子規が同年代になる。彼らは明治青年として一つの世代に属すると言ってよいだろう。彼らには共通するものがあり、それは明治のナショナリズムであった。

本節では岩崎が事前にかなる教育を受けて札幌農学校に入学するに到ったか、その教育的な遍歴を追究し、生涯の親友・内村鑑三(以下、内村と表記する)の場合と比較しつつ人間形成の過程を追究する。と同時に本節は、岩崎たちがそれぞれの「雲」を見付けて共に坂を上りつつ峠近くまで来た歩みを記述するものである。

さて、国家の主権の所在が移転し、国家・社会の価値観が大きく変貌する場合を革命というならば、明治維新は徳川から天皇に主権が移転したのであるから革命(明治維新革命)であった。岩崎はこの革命期に青少年時代を生き、そして彼の人間形成が行われた。そして太平洋戦争の終戦においても主権が天皇から国民に移転し、これに伴い国家・社会の価値観も大きく変貌したから革命(八月革命)といってよい。岩崎の人間形成を八月革命期に青少年時代を過し人間形成を行った者と比較して考察することは、その異同が明らかになることによって八月革命の特徴も新たに見えてくるであろう。

2 東京英語学校入学まで

明治維新の最中、1868年10月23日(慶応4年9月8日)、明治天皇が即位し、慶応4年は明治元年に改まった。

このとき、岩崎は京都に住んでおり、12歳であった。

「明治人物伝をひもどくとき、貧乏士族青年の苦学力行の立志訳が数多くみられる。士族は没落の運命にさからい、家運再興といった先祖の歴史に鼓舞激励されたのであった。士族社会においては、没落せる階級の悲哀を感じると同時に、貧乏を克服して時勢に飛躍せんとする発憤の意気が盛んであった。」⁽¹⁾

岩崎、内村もこの様な貧乏士族青年であり、学に志すのである。

岩崎、内村、宮部金吾(以下宮部と表記する)や新渡戸稲造(太田稲造と名乗った時期もあ

るが、以下新渡戸と表記する) が学んだ東京英語学校は当時の「最高の学校」⁽²⁾であった。

では岩崎はどのようにしてこの「最高の学校」に入学できる高い学力を培ったのか。

先ず岩崎が修得したのは漢学および国学であった。

維新前、幼少年時代において京都の家庭で母や知人から大学、中庸、論語、孟子の四書の素読を教育された。このあと、12、3歳の頃、恐らく私塾を開いていたであろう二人の師に就いて漢籍を学んだ。師の一人は日柳三舟である。日柳は讃岐(香川県)の人で、岩崎と同郷人である。当時、新政府の軍事防衛を司った機関である軍務官(1868(明治元)年6月-1869(明治2)年8月)の筆生である。筆生とは、明治初年の官庁で、記録・筆写などに従事した判任官である。日柳は後に、大阪府学務課長を務め、大阪師範学校長に就任。さらに盲啞学校愛育社を創設し、「浪華文会」において国定教科書の原型を作るなど教育面で大いに活躍した。なお、岩崎は書道も別人から学んでいる。

そして1869(明治2)年12月からは開講された「皇学所」に入学して本格的に国学を学んだ。「皇学所」は明治新政府により1868(明治元)年9月に京都に設置された「高等教育機関」である。しかし校運は振るわず、1870(明治3)年8月に廃止された。

さらに1870(明治3)年東京に移住してからは近藤佳山や尊皇派の漢学者・宇田甘冥⁽³⁾から漢学を学んだ。

以上の学歴から岩崎は国学、漢学については相当高い学力を修得したと思われる。

ところで岩崎家は先祖代々神道を奉じ、父は幕末に尊皇攘夷の志士として活躍した。そこで岩崎が国学、漢学を学ぶことは自然な成り行きであろうが、興味深いことに「攘夷の子」と自称する岩崎は進んで英語を学ぶのである。

1872(明治5)年、欧米の教育制度に倣って学制が頒布された。

「学制頒布の前後に於いて最も盛況に向つたのは、醫學校、法學校及び外國語學校であつた。當時専門學校といふのは総て欧米人を雇ひて教授する高尚なる學校を汎稱したものである。専門學校は元來邦語で教授するのが目的だが、當時にあつては學術を欧米から入れる關係上欧米人を雇用して教授せしめねばならなかつた。故に外國語に通ずる事は専門の學問を修むる上に先づ第一必要條件となつたのである。こゝに於いて必然的要求として外國語學校を各地に設立するに至」⁽⁴⁾った。

当時、東京に燃え上がった外國語學習熱、特に英語學習熱は、全国に広がり、地方の志ある青年も当地の外國語を教授する塾や學校に押し寄せたのである。

岩崎はその青年だったのである。東京に暫く生活した後、「明治8年樺太千島交換の事あるや余時に年18家君に従ふて大阪に在り 府立集成學校に学ふ」⁽⁵⁾

大阪の府立集成學校は、現在の大阪府立北野高等學校の前身である。

「北野高校關係の資料によると、まず明治6年(1873)4月20日に『歐學校』として設立開校されましたが、わずか10日後の同年5月2日に『集成學校』と改称されました。正式に『集成學校』と称されたのは明治6年(1873)5月2日~明治10年(1877)8月31日で、翌日の明治10年(1877)9月1日から、別に開設されていた『進級學校』と合併し、『大阪第一番中學校』になりました。以後、様々な変遷を経て、昭和23年(1948)に大阪府立北野高等學校となっています。」⁽⁶⁾

岩崎の英語力は、この集成學校で修得したようである⁽⁶⁾。

ちなみに同期生の内村たちもそれぞれ外国語学校、私立、の出身者であり、内村は有馬学校、宮部は高嶋学校、修文館、新渡戸は共慣義塾から、東京外国語学校に入学した。

このようにして岩崎は漢学、国学および英学について難関校を突破するに必要な高い学力を修得したのである。それは家庭教育、私塾による教育、皇学所および集成学校による学校教育から得られたものである。

岩崎は、1875（明治8）年に、1874（明治7）年12月に開校された陸軍士官学校を目指して上京する。

当時、日本はロシアとの間で、樺太や千島の帰属をめぐる紛争が起こっていた。

青年岩崎は、「攘夷家の子豈時事を慨する痛切ならざるを得んや。以為へらく父祖の志を継ぎ報国の至誠を致さんには軍人となるに如くものなし」⁽⁷⁾とし、陸軍士官学校を志望したのである。岩崎の父、致行は幕末に水戸藩の同志と共に活躍した勤皇の志士であり、この志望に大いに賛同したことと思われる。

岩崎は父の許しを得て上京し、諸先輩に陸軍士官学校入学を相談したのである。ところが「先輩は余の拳を賛するも蒲柳の質到底軍人の資にあらざるを誡め、大学に入らんことを勸」⁽⁷⁾めたのである。それは青春の蹉跎というべく岩崎は大きな挫折感を味わったことだろう。

岩崎は言う、「余の失望知るべきなり。余猶軍人の志を断たざるも暫く先輩の忠告に従ひ、大学予備門に入れり」⁽⁷⁾。

3 東京英語学校および大学予備門時代

(1) 東京英語学校時代

岩崎は1875（明治8）年に大学予備門に入学したと記述している。しかし、大学予備門が設立されたのは、1877（明治10）年4月であるからこれは間違いで正確には東京英語学校である。

東京英語学校は、1874（明治7）年12月、東京外国語学校の英語科から分離・独立して設立されている。

東京英語学校の前身になる東京外国語学校は、新渡戸、内村、宮部たちが本格的な公的学校教育を受けた最初の学校である。

外国語学校は「明治六年四月二十八日 文部省布達第五十七号 学制二編追加」⁽⁸⁾によれば外国語学に達することを目的とした。そして専門学校に入る者や通訳を学ぶ者はまずここで学ばなければならなかった。修業年間は4年間で上等および下等の2科に分かれ、それぞれ2カ年であった。

東京外国語学校は明治政府によって、1873（明治6）年8月に、はじめて設立された官立の外国語学校である。官立の外国語学校は、他に宮城外国語学校、愛知外国語学校、大坂外国語学校、広島外国語学校、長崎外国語学校があった。

外国語の教育機関をもとめる声は当時非常に高かったので、「首都に外国語学校が設立されたと聞くや、全国各地から生徒たちがまさに群れをなして集まり、中には、11、2歳の子どももいたが、大部分は青年」⁽⁹⁾であったという。

東京外国語学校の前身は開成学校であり、1873（明治6）年4月、開成学校は諸芸学（今の文科にあたる）、鉱山学、法学、理学、工学の専門学科を開設し、その生徒を下等中学一級以上

を専門学校生徒とし以下を語学生徒とを区分した。折しも開成学校の校舎は新築されることとなり、1873（明治6）年8月に竣工した。この際に、新築の校舎を東京開成学校と称して専門部の生徒を移し入れた。他方、旧校舎には開成学校の語学生徒を留めて東京外国語学校と呼んだ。

東京外国語学校の教授語学は、英、仏、独、露、清の五種であったが、それに到るまでには次の経緯があった。

東京外国語学校は「元開成学校ニ於テ専門学科ヲ設ケンカ爲メ各国ノ語学ヲ教フルニ始リ外務省所管語学所ヲ收管スルニ成ル。明治二年正月始テ英仏二国ノ語学科ヲ置キ尋テ独語学ヲ置ク。六年四月生徒ヲ区分シ下等中学一級以上ヲ専門学生徒トシ以下ヲ語学生徒トス。五月外務省設クル所ノ獨魯清語学所ヲ文部省ニ收管シ更ニ生徒ノ学力ヲ検査シ外国語学教則ニ準據シテ学級及教科ヲ改正ス。八月開成学校新築成リ専門学生徒此ニ徒ルニ至リ遂ニ同所ヲ東京外国語学校ト稱シ外務省語学所ヲ合併ス。学科ハ英仏独魯清ノ語学ヲ授ク。」¹⁰⁰というものである。

東京外国語学校は、1873（明治6）年11月29日付文部省布達により初めて生徒募集をおこなった。このときは英、仏、独の三語学の下等第二級以上の学力を有する者だけの募集であった。

この結果は、『文部省第一年報』に収録されているものであろう。

この時、新渡戸は英語科に入学したようである¹⁰¹。

『文部省第一年報』は、1873（明治6）年の「全国学事ノ状況及ヒ其既往ニ係ル沿革等ヲ輯録」¹⁰²したものであるが、そこに掲載された計数は、原則として明治6年12月現在となっている。

本書に掲載された東京外国語学校の生徒数は、生徒総数は453名であり、語学別内訳は次のようである（括弧内は対総数比）¹⁰³。

	等	第1級	第2級	第3級	第4級	合計	総計
英語学	上等	28		24		52	236 (52%)
	下等	29	29	28	98	184	
仏語学	上等				32	32	75 (17%)
	下等	20	14	9		43	
独語学	上等				10	10	96 (21%)
	下等	20	27	21	18	86	
魯語学							14 (3%)
	下等	5			9	14	
清語学							32 (7%)
	下等	9	9	5	9	32	
合計		21	79	87	176	453	(100%)

次いで、1874(明治7)年2月8日付文部省布達により東京外国語学校は、英語学・仏語学・独語学・魯語学・清語学「脩業志願者」(13歳以上18歳未満)を募集した¹⁰⁴。

内村、宮部¹⁰⁵たちはこのとき東京外国語学校英語学に応募し合格して3月に入学した。

「東京外国語学校官員並生徒一覧」(明治7年3月)により生徒の箇所を見ると、英語学下等第四級に「熊谷 内村鑑三」と記載されている¹⁰⁶。

なお、この「生徒一覧」によれば英語学については、後年に同じ札幌農学校に学ぶことになる「岩手 佐藤昌介」が英語学下等第五級 乙に、「高知 廣井 勇」が英語学下等第六級 丙に、

同じく最下級の丁に「東京 宮部金吾」の名前が記載されている¹⁷⁾。

内村は、東京外国語学校入学当時佐藤、廣井や宮部より一段と上級であり、彼の英語の力が相当高かったことが分かる。

英語科は、生徒は全校生徒の約半数を占め、外国人教師も英、米合わせて7人（外国人教師15人の半数）という多数である¹⁸⁾。

英語学に、また英語学習にこれほど多くの生徒が集まったのはどういう理由からか。

優れた地理学者でありお雇い外国人であったメーチニコフは、「東京外国語学校の思い出」において、「当時日本に滞在していた外国人の半数以上がイギリス人とアメリカ人でしめられており、彼らはじきに官界、商工界の主要活動部門を掌握してしまったのだから。」¹⁹⁾といい、「外交交渉の場では、英語がそれまでのオランダ語にとってかわったし、海軍省や陸海軍工廠は、当初から英米人の手にゆだねられていた。鉄道を建設したのもイギリス人である。そしてなによりも大きいことに、アメリカはさておき、イギリスの息のかからないような商業部門は、日本中にほとんどないといってもいいのである。」¹⁹⁾と、説明している。

また、次のような説明もあり、これもまた、正しいであろう。

實際上、米国、英国との交渉は日に月に濃密になり社会に於ける英語の需用が頓に増して来たのである²⁰⁾。

「たしかに当時はそういう社会背景があったが、英語学生徒が最も多かったのは、より直接的には、進学校である東京開成学校の教授用語が英語だったからである。その次に独語学生徒が多かった。ドイツ語を教授用語とする東京医学校があったからである。」²¹⁾

このためか1874（明治7）年には東京英語学校など8校の官立英語学校、修文館（神奈川、明治5年設立）など5校の公立学校、攻玉学舎（東京、明治7年設立）など英語を教える全国にわたる多数の私立語学学校があった²²⁾。

ところで、当時、外国語学校英語科の生徒はどのような授業をうけたか。

これについては『文部省第一年報』²³⁾によって推察するほかない。

そこには修業年限4年制の、上下等各級の全課目の記載ではないが学科課程、教科書と思われる学科教授書籍、教職員数および生徒数などが掲載されている。

上等も下等も1週30時で、下等第四級の授業時間では会話6時、綴字6時、習字6時、読方5時、諳誦1時の計24時が語学で、語学以外の科目は算術6時となっている。

最上級の上等語学第一級では、文典3時、読方3時、作文2時、書取2時、会話2時、習字2時、綴字2時、論理1時、諳誦1時の計18時、語学以外の科目は画学2時、算術2時、代数学2時、幾何学2時、歴史2時、地理2時となっている。

しかし、1874（明治7）年2月、東京外国語学校の語学課程は改定された。課程は上下二等に分けられ、各等3カ年で6年間となった。各等は6級に編成し、教則を編定した²⁴⁾。しかし、「其科目ノ如キニ至テハ尚又改正セサルヲ得サルニ因リ、同年四月開成學校教授獨人リットル氏英人ソンマール氏及本校佛語學教諭佛人ムリエ氏ヲシテ協議訂正セシム」²⁵⁾ということになった。

1874（明治7）年12月、東京英語学校が設立された²⁵⁾。

この学校で岩崎、内村、宮部、新渡戸らはお互いを知り、親交を結ぶのである。

東京英語学校は、東京外国語学校の英語科を独立させたもので、東京外国語学校の英語学の

教員と生徒は東京外国語学校からそのまま移籍させ、課目も教授法もそのまま移植した。

東京外国語学校、東京英語学校について『文部省第二年報』に掲載の「明治7年・外国語学校統計表」²⁶⁾によれば、次のように記載されている。

名称	何立	位置	設立	何語	教員	外国教員	生徒・男	学校主
東京外国語学校	官	東京一ツ橋通町	安政2年	仏独魯清	17	米1仏3独3 瑞西1魯1清1	423	肥田昭作
東京英語学校	同	東京表神保町	明治7年	英	5	米1英8	337	同

同じ『文部省第二年報』に掲載されている1875（明治8）年3月の「東京英語学校年報」には次のように記載されている²⁷⁾。ここには「下等」のみが記載されており、「上等」についての記載がない。この間の事情は、後述の註32を参照されたい。

英 語	等	第1級	第2級	第3級	第4級	第5級	第6級	合計
	下等	18	16	25	67	104	117	337

そして1874（明治7）年12月、各地における官立の外国語学校（愛知、大阪、広島、新潟、宮城）も各々英語学校と改称された。他方、この時以来、東京外国語学校は仏、独、露、支語を教えることとなった。

岩崎は、1875（明治8）年、樺太・千島交換が国際問題になっている頃、大阪府立集成学校に学んだ後上京した²⁸⁾とあるから、東京英語学校には1875（明治8）年に入学し、おそらく上級の学級に編入されたようである。

そこで東京外国語学校およびその系譜の東京英語学校に入学したのは、新渡戸が最初で、次が内村、宮部、さらに岩崎ということになるようである²⁹⁾。

そして、岩崎は、1876（明治9）年、東京英語学校の上級に在学しており、内村、宮部、新渡戸らと同級であった。この時、ここに岩崎と内村二人の出会いと終生の交流は始まった。

なお、内村は、東京外国語学校入学当時は、宮部よりずっと上級であったが、一年有余の病氣休学によって四人は同級となった。

ところで東京英語学校はどんな学校であったか。

それは東京英語学校の以下の「校則要略」³⁰⁾により概略を知ることができる。

「第一 當校ハ英語學ヲ志ス者ヲ教授シ上下二等ノ語學教科ヲ卒業スルヲ以テ法トスル事(但専門學校ニ於テ生徒ヲ募ルトキ其試問ニ合格スヘキ教科ヲ踏ミタルモノハ上等語學ノ教科未タ卒業ニ至ラスト雖モ各自ノ望ニ任セ専門學校ヘ移ラシムルコトモ亦アルヘキ事)

第二 當校教科ヲ二等ニ分チ一ヲトシ上等語學トシ一ヲ下等語學トスル事

第三 修業年限ヲ六年トシ其内前三年ヲ下等語學後三年ヲ上等語學ノ期限トスル事

第四 此上下二等ノ語學ニ各六級ヲ置キ每級半年即チ一期ノ課業トナシ一日正課ヲ四時間ト定ムル事

第五 學歲ノ始メヲ九月一日トシ其終リヲ七月十五日ト定ムル事

第六 九月一日ヨリ翌年二月十四日マテヲ第一期トシ二月十五日ヨリ七月十五日マテヲ第二期ト定ムル事

第七 當校ハ當分生徒六百員ヲ以テ限トスル事

第八 入學ハ毎年兩度ニシテ定期試業ノ後トス最モ生徒欠員アルトキハ臨時入學ヲ許スコアルベキ事

第九 入學ヲ許スヘキ生徒ハ其年齢十三年以上十七年以下タルヘキ事 (但學業優等ノ者八年齡此限ニアラサル事)」³⁰⁾

とりわけ教育課程はどんなものであったか。

それは『文部省第三年報』には下等語学と上等語学の2教育課程が詳細に掲載されている³¹⁾。また、先述の「校則要略」第一、第二にも規定されているとおりである。しかし、第一の括弧書きにより上等語学課程は有名無実になったようである³²⁾。

そこで本稿では生徒として学んだ宮部の記述により実際の教育課程を見ることにする。

東京英語学校の教育方針は「全部英語の所謂正則主義で、教師は英米人が主となり、下級には邦人が加はり、最下級は邦人のみで担当した」³³⁾。

英語の正則教授は、「一級全科目を通じ一外人が算術、読方、綴方、地理、歴史等皆英語の教科書を使用してこれを担当してゐた」³⁴⁾のものであった。これに対し慶応義塾のような訳読式の教授法を「変則」と言った。

英語学校の学級は、「一級から六級にわかれ、一級から三級までは一組、四級は甲乙の二組、五級は甲乙丙の三組、六級は甲乙丙丁の四組から成つてゐた。最下級六級の丁組を振出に、各級擔任教官監督指導のもとに、毎月若しくは二、三箇月毎に小試験が行はれ、その成績の優良なものは抜擢進級せしむる制度であつた。」³⁵⁾

そして宮部はこの進級制度による自分の進級について、つぎのように述べている。

「私は先に記したやうに入学當時は六級の丁組にゐたのであるが、同年五月には級のもの四、五名と共に丙組に進級、六月には乙組に、九月には甲組に、同月重ねて五級の丙組に、十一月には五級の乙組に、翌八年の三月には五級の甲組に、七月には四級の乙組に、十月には四級の甲組に、更に翌九年の三月には三級に、九月には二級に、十年の三月には一級に進んだ。このやうに殆ど試験の度毎に幸なる進級をつゞけた。」³⁶⁾

なお、東京英語学校の生徒数は、1875 (明治8) 年546人、1876 (明治9) 年466人であった³⁷⁾。

(2) 東京大学予備門時代

1877 (明治10) 年4月、東京大学予備門が、東京開成学校の予科に東京英語学校を合併して改編し設置された。東京大学予備門は、東京大学の法・理・文学部の諸専門科に入学すべき生徒に、予備教育を施すことを目的として4年制を取った。地方中学校が当時未整備のため、予備門は大学の予備教育機関として重要な意義をもっていた。

岩崎ら東京英語学校の生徒のまま東京大学予備門の生徒となった。彼らは、東京外国語学校、東京英語学校の後身であるこの学校の第一級にあって、このとき1877 (明治10) 年、岩崎は級友の中で最高齢者で21歳、内村は17歳、宮部は18歳、新渡戸は16歳であった。

東京英語学校・東京大学予備門で多くの生徒に強い印象を与え、学力の修得に大きく寄与したのはお雇い外国人M・M・スコットの授業であった。スコットは1875 (明治8) 年3月から東京英語学校・東京大学予備門等の教壇に立ち、1881 (明治14) 年日本を去った。

内村は、「其時私共は、今の第一高等学校の前身なる大学予備門の最高級に在りて、我国師範教育の指導者たる米人スコット氏より初めて教育らしい教育を受けました。」⁸⁸

「此時私共は初めて、教育の外より知識を注入する事に非ずして内なる知能の開發にある事を知りました。岩崎君も私も、他の多数の同級生と共に、私共の生涯の全部を通して米国人スコット氏に負う所甚だ多きを忘るる事は出来ません。」⁸⁸

明治の英語青年たちを魅了したスコットの教育とはどんな教育であったか。

内村、宮部、新渡戸の記述によって、東京大学予備門の第一級におけるスコット教室の様様をおおよそ知ることができる。彼らの話は英語学習で苦労した者に感銘を与えるであろうし、また、スコット・メソッドは今日、英語教育者でも知る人は殆ど無く、英語教育に示唆を与えるものがあるかも知れないと思い、以下に長く紹介する。

第一級および第二級の担任教員であったM・M・スコット⁸⁹は、東京英語学校の従来の教育方針に従って、第一級、第二級の「唱歌」および「体操」を除く全科目を英語教科書を使用し、教えていたものと思われる。特に英語を教えることにすぐれ、生徒たちは彼によってはじめて英語というものに対してその目を開かれたという。

岩崎との関わりが深い内村の回想を紹介する。

「私をして今日あらせてくれた過去の教育的要素はいろいろあったが、其中智力の側面にて先づ指を屈したいのは大学予備門時代において幸にも受け得たスコット氏の語学教育である。彼の授業を受ける以前に私が英語学に費やした年数はかなり長かった。また私を教へてくれた英語教師は随分多かった。しかし其頃私のみならず、私時代の学生大多数にとって、外国語の課業は最も煩はしい、否最も嫌な学課の一であった。しかるにスコット氏のメソッドは私等をして英語の勉強に多大の興味を覚えさせるに至った。(中略)

此人の英語教授を大学予備門に於てうけた時、私等は全く一の新天地に導き入れられたやうに感じた。その以前に行なはれた英語教育をかためて居たのは単語暗記主義と文法尊重主義とであった。然るに此人によって、私等が教へられたのは全然その反対であった。といふのは単語一つ一つの意義を記憶させられるよりも、寧ろ若干数の言葉が相集つてなして居る集団の内容を理解するやうに導かれたのであった。此等の集団を名付けて文法学者はフレーズとかクローズとか云ふであらうが、其名称は兎に角として、私等は当時此等をもつと広義に解してゐた。(中略)ここに一例をあげるならば(勿論これはスコット氏の用ひたものではないが)God is loveと云ふ一文は三つの単語によつて出来てゐる。これを切り離して、第一は名詞で主辞、第二は動詞で単数三人称現在、而して第三は名詞でcomplementであると仕分けてみても、思想上何等の意味も出て来ない。然るにこれを一のグループとして見れば、即ち「神は愛なり」といふ意義に於て解すれば、そこに直ちに深い意味と大いなる力とがあらはれて来るであらう。スコット氏のお蔭で、私等の注意は単語の煩はしきより解放されて、言葉の集団が有する其内容の意味に初めて導き入れられた。

次に彼の工夫として思ひ出されるのは文法上の術語とか規則とかに拘泥しないで、毎週一回かなり多くの短い英文を作らせた事、またかやうにして英語を實際上に運用して以て我々自身の思想感情を發表させたことであつた。かやうな手引によって、形式的文法第一主義より一転して、私等のひき入れられたのは作文尊重主義であつた。その以前に英文法の講義を私等の

ために聞かせてくれた教師は幾人であったかはや記憶して居ないが、どの先生もどの先生も文法のアナリシスに囚へられて、八品詞中動詞の中程に来る頃には既に時間がなくなって、大抵其講義は打切られてしまった。随つて肝心のシンセシス（総合的の組立方）など全く教へられずに学期や学年の終りとなるのが常であった。しかるにあの七面倒なparsingなどで私等青年を困らせずに、スコット氏はいきなり作文を私等に課して、英語其物を実際的につかはせてくれた。

（中略）かやうにして外国文を読む分量に比較して、寧ろより多く外国語を実地につかはせてみるといふのがスコット氏語学授業法の第二特徴であった。

お蔭で私等の英文に対する面白味は段々と強められた。これを言ひ換れば、単語一々の詮索よりも寧ろグループス内容の理解を先にし、また形式的文法の規則を覚えるよりも英語そのものを自ら使つてみてこれを理解し、而してその理解を新しい英文の解釈に応用させるといふスコット氏のメソッドは私等に対して極めて有効であつた。かやうに読んで使ひ、使つては読むといふ流儀で両面相補つて行くといふ教授法に対して、私は今も尚ほ大いに感謝して居る。」⁽⁴⁰⁾

「スコット氏のメソッドは私等をして英語の勉強に多大の興味を覚えさせるに至つた。私等の同級中には外国語学に於て、随つてまた種々の専門学に於て、其後傑出した人々が少くない。新渡戸稲造君が其一人であつたのは云ふ迄もない事として、岩崎行親君（其後鹿児島島の造士館長より第七高等学校創立当時の校長となられた私の親友）の如きも亦た欧羅巴語学に於て堪能な一人であつた。」⁽⁴¹⁾

内村だけでなく宮部、新渡戸もスコットへの回想をそれぞれ修得した事柄に個性的な感謝をもって記述している。例えば、「私の文学の趣味と愛好は、スコット先生に負うものである。」⁽⁴²⁾とは新渡戸の謝辞である。

太田雄三は「一八六一年から前に二、三年、後に四、五年くらいのびる合計一〇年ぐらいの期間に生まれて、高等教育を受ける機会に恵まれた人々が、実は近代日本で最も英語（または他の欧語）を深く身につけたグループであつた」⁽⁴³⁾といい、彼らを「英語名人世代」と名づける。内村、新渡戸および岡倉覚三がその代表とされる。なお、岩崎にはF. プリンクリー、南条文雄と共編著である『和英大辞典』三省堂、1901という名著があり、本書は多く版を重ねて、広く使用された。岩崎もこのグループに含めてよいであろう。

また太田は、ウィリアム・スミス・クラークの「あとを継いで札幌農学校の教頭となったウィリアム・ホイラーは、入学したての二期生を観察して、彼らの会話力が一年前に入学した当時の一期生の場合よりもすぐれている、という印象を受けている。（中略）ホイラーの言いたかつたのは、一期生もよく英語が話せたが、二期生はそれよりさらによい、ということであろう。」⁽⁴⁴⁾と、内村たちの英語力を説明している。

東京大学予備門は、1886（明治19）年4月の「中学校令」により第一高等中学校、1894（明治27）年6月の高等学校令により第一高等学校となるのであるが、岩崎が東京英語学校および東京大学予備門に在学したのは、1875（明治8）年から1877（明治10）年6月まで足かけ3年間の短い期間だった。

4 札幌農学校への入学

(1) 札幌農学校への入学

1877（明治10）年は西南戦争が起りかつ鎮定された年である。帝都がその戦報によって騒然とした中に6月14日、東京大学予備門に北海道開拓使の一官吏、九等出仕・堀誠太郎が来校し、校長の特許を得て宮部たち第一級（最上級）の教室にて札幌農学校官費生募集の演説を行った。

「氏はその時初めに北海道の開拓を説き、更に進んで北国の風物を非常に興味深く面白く話され、終りに官費制度の事を詳細に語られた。学費の乏しかつた士族の子弟が多かつたので、官費であるといふ點が特に注意をひき、十二名も志願する結果となり、時の校長服部一三氏を驚かす事となつた」⁽⁴⁵⁾。

札幌農学校第1期生の場合、志願者は東京英語学校の生徒であつたから面接試験、試験官クラーク博士（初代教頭）、ペンハロー教授、ホイラー教授による面接試験があつた⁽⁴⁶⁾。しかし学校制度が変わり東京大学予備門の一級、二級の生徒は無試験で入学を許されるようになったから、体格検査だけが行われた。その結果、岩崎も、内村については医者が胸を診て首をかしげたものの注意を受けただけですみ、全員合格した。

岩崎の同期生となる当時の入学者18名の氏名は次の如くである⁽⁴⁷⁾。

東京大学予備門より入学（十二名）

足元太郎	藤田九三郎	伊藤英太郎	伊藤鏗太郎	岩崎行親
毛受駒次郎	宮部金吾	永井於菟彦	太田稻造	佐久間信恭
高木玉太郎	内村鑑三			

工部大学豫科より入学（四名）

廣井勇	町村金彌	南鷹次郎	諏訪鹿三
-----	------	------	------

長崎英語学校より入学（二名）

村岡久米一	西村規矩
-------	------

東京大学予備門は、当時、立身出世の登竜門であつた。ここに在学しないで、札幌農学校を志願する経緯や理由は岩崎、内村、宮部、新渡戸それぞれに異なっていたが、岩崎については次のようである。

東京英語学校在学中に岩崎に再び軍人志望が起るのである。

1875（明治8）年5月に、樺太・千島交換条約がいよいよ調印される頃と推察されるが、「此政府の政策が気に入りませぬから再び軍籍に上り軍人となつてご奉公がしたくなりましたが、徴兵官松尾某は到底蒲柳の質であるから見込みなしと言はれて困って居るとき」⁽⁴⁸⁾に、すなわち青春の第二の蹉跎というべき時か、札幌農学校の募集があつた。

「私は其農学校の教科課程は全然開拓に必要な学科を教へ尚兵科もあつて之を卒へれば少尉の資格が得られるとの事で屯兵の將校となり樺太を歟の先でとりかへすこんな面白い事はないと思つて（中略）大阪の父の許可を得てもらつたのです。」⁽⁴⁹⁾

北海道にあって1屯田兵となりたいというのである。軍人となり、国防に当たりたいという宿昔の志はなお埋もれてあり、その火は消えていなかったのである。

また、内村は、後年、当時の心境を次のように回想している。

「余は武士の家に生れた者であるから、余の父は余の幼少の時より余を役人に為さんと欲し

た、彼が其貧しき家財を投じて余に僅か計りの学問をさせて呉れたのも所謂余の青雲の志を達せしめんためであつた。それ故に余が明治の初年に大学予備門（今の第一高等学校）に通学し居る頃は余は専ら政府の役人に取り立てられんことを欲した者である、余の父は余が大学に入て政治又は法律の学を修めんことを望んだ者であつて、余も亦出来得る丈け父の志に従はんと欲した。」⁵⁰

ところが内村は進路を大きく変更して札幌農学校に入学するのである。

進路変更は新渡戸についても同様だった。「維新の余波がまだ充滿していたこの時代に、偉くなる唯一の職業といえば、政治にかかわるものであり、私は社会的出世に最も見込みのあるその職業に、当然心を引かれていた。」⁵¹。

彼らの進路変更の理由は何だったか。官費制度、すなわち経済上の理由は大きく直接の原因であつたろう。しかしそれだけではなかったと思われる。内村たちにはある志が芽生え、あるいは成長していたのである。

新渡戸は「私達が学問をするのは、決して名誉や栄光のためではなく、人生には家名や個人的栄光などより、もっと高い目標があるにちがいない（中略）。人の教育は、その人の国の役にたつためであるべきだ。」⁵²。つまり、生涯の仕事に関する考えの方向を「政治への軽率な野心と個人的栄光への憧れから」⁵³。「国に貢献するという理由」⁵⁴へと転換したのである。

また、内村は言う、「余は政治を棄て農業を以て国家民衆を益せんとした、余は思ふた。政治の目的は名誉を得るにあつて、農業の目的は饑を癒すにあると、さうして実物は空虚よりも価値があるがあるゆゑに農業は政治よりも大切であると思ふた。」⁵⁵と。

岩崎も同様に「ご奉公」する志で札幌農学校に進路変更した。彼も個人的栄光、貧してはいたが暖衣飽食の生活の憧れとは無縁であつた。

岩崎、内村、新渡戸、宮部らの篤い友情の絆はこのような清貧、公共の精神およびナショナリズムの思想を共有していたところに根ざしているであろう。

明治の「坂の上の雲」も、青春像も、秋山兄弟あり、岩崎たちありで、多種多様だった。ここ、多様な可能性の中に繰り返し興る明治への現代人の郷愁が胚胎するのもかも知れない。

さて、岩崎、内村、宮部、新渡戸らは1877（明治10）年7月27日付の「開拓使所属札幌農学校官費生を申付」という辞令を受けた。

因みに秋山好古は1877（明治10）年5月4日、東京市ヶ谷台の陸軍士官学校に第3期生として入学する。

18名の2期生は札幌農学校への入学が決まり、東京を出発するまで東京に自宅の有無にかかわらず、全員が芝区新橋5丁目の植木屋という開拓使御用宿に合宿するよう命じられた。そこに約1ヶ月間滞在して当時開会中であつた第1回内国勸業博覧会を見学したり、いろいろ見聞を広めるために時を過した。

(2) 立行社の結成

合宿の1ヶ月の間に内村、宮部、新渡戸の三人の他に岩崎が参加して四人組を組織し、立行社を結成した⁵⁶。このことは彼らを理解する上で興味深い事実である。その規約は身を立て道を行ふという簡単なものであつたが、彼らがストイックな道徳観・倫理思想を早くも確立して

いたことを示している。そして、規約には「酒色を慎む」という1箇条もあったが、これについては4人とも生涯道を棄てなかった。

5 まとめ

明治維新の最中、慶応が明治に改元した時、岩崎は数え年、12歳の少年であった。

14歳の岩崎は、笈を負って郷関・大阪を出て、帝都の東京英語学校で高等の英学と学問を勉強することとなった。

「明治維新後、新政体採用とともに、新しい人間と新しい方法が要求された。今まで蔑まれていた人々や、少なくとも世間に知られていなかった人々が登場した。政治的大変動の直ぐ後に続いて、階級打破運動と特権廃止の流血なき革命があった。新時代の夜明けが、まさに始まっていた。」⁵⁷⁾

この時期、東京での学校生活、3年間の東京英語学校および東京大学予備門時代において、岩崎は、全国から集まった秀才たちと共に学術の研鑽に努める中で、新しい人生の目標を見出し、善良ないくたりかの友人、特に終生の友、内村に恵まれ、前途ある有為な青年として人格と社会的活躍の基礎を据えた。

1877（明治10）年8月27日、岩崎たちは、開拓使の御用船玄武丸で品川から、信頼すべき友人と共に血気と希望にあふれて未知の大地、札幌に向かった。

この時、彼らに浮かぶ思いは、おそらくは下記の、後年、彼らの後輩が作詩した歌詞の一節に通うものではなかったか。

「都ぞ彌生の雲紫に 花の香漂う宴遊の筵
 尽きせぬ奢に濃き紅や その春暮れては移ろう色の
 夢こそ一時青き繁みに 燃えなん我が胸想を載せて
 星影冴かに光れる北を 人の世の清き国ぞと憧れぬ」⁵⁸⁾

9月3日、彼らは小樽に入港し、初めて乗る馬によって大いに疲労しつつも無事、その日の薄暮、札幌農学校の寄宿舎に着いた⁵⁹⁾。

これから送る4年間の札幌農学校生活は、後年内村が述べたように、確かに「茲に私供に取り終生忘るべからざる最も楽しき教育を受けました。」⁶⁰⁾といえよう。しかし若者たちにとって札幌農学校時代は「シュトゥルム・ウント・ドランク」の時代でもあり、この時キリスト教徒ではなかった岩崎、内村、宮部、太田たちは、特に岩崎は退学を決意するほどまでの、大きな疾風怒涛と対峙することとなるのである。

註

- (1) 福地重孝『明治社会史』弘文堂、1965・復刻版、2010、74頁。
- (2) 新渡戸稲造『新渡戸稲造「幼き日の思い出／他」』日本図書センター、1997、53頁。
- (3) 宇田甘冥は、「デジタル版 日本人名大辞典+Plusの解説」によれば、宇田健斎（1819－1883）といい、「幕末－明治時代の儒者。文政2年生まれ。藤田丹岳の次男。京都の医師宇田家にはいり、文久のころからおしえる。維新後東京で新政府につとめる。明治4年京都

にかえって小学校教師となり、のち私塾をひらいた。明治12年物理学の入門書『物理了案』を刊行。明治16年8月10日死去。65歳。」とある。<http://kotobank.jp/word/%E5%AE%87%E7%94%B0%E5%81%A5%E6%96%8E> なお、小林実「解題」宇田甘冥述『万国一夜談』（浅倉久兵衛、1873。リプリント、国文学研究資料館、2006、145頁）によれば、宇田が京都に帰った時開いた私塾は温古塾である。

- (4) 東京外国語学校編・発行『東京外国語学校沿革』1932、15頁。
- (5) 岩崎行親編・発行『忠芬義芳録』1912、3頁。
- (6) 大阪府立中之島図書館からの集成学校についての筆者の質問に対する回答（【管理番号】OSPR11090074）。2011年9月22日19:40受信。なお、集成学校は、「明治八年外国学校一覧表」『文部省第三年報 第一冊』（復刻再版、宣文堂、1964、615頁。）に掲載されている外国語学校であり、地名 大坂舊城南久太郎町、設立年 明治6年、英語などと記載されている。ただ、私立となっているが、これは誤記と思われる。

岩崎は、集成学校で1875（明治8）年6月の定例試験で優等生として一等賞を賞与されている（北野高等学校『北野百年史』北野百年史刊行会、1973、69頁）。
- (7) 岩崎行親編、前掲書、3頁。
- (8) 「第百九十五章 外国語学校ハ外国語学ニ達スルヲ目的トスルモノニシテ専門学校ニ入ルモノ或ハ通弁等ヲ学ハント欲スルモノ此校ニ入り研業スヘシ 但此校ニ入ルモノハ小学教科ヲ卒業シタルモノニシテ年齢十四歳以上タルヘシ」文部省『学制百年史・資料篇』ぎょうせい、1972、24頁。
- (9) メーチニコフ著渡辺雅司訳『回想の明治維新』岩波書店、1987、272頁。
- (10) 『文部省第一年報』復刻再版、宣文堂、1964、163頁。
- (11) 「内観外望」新渡戸稲造『新渡戸稲造全集』第6巻、数文館、1984、405頁。
- (12) 『文部省第一年報』、前掲書、「文部省第一年報例言」。
- (13) 『文部省第一年報』、前掲、168頁。
- (14) 「第四號 二月八日
第一大學區東京外国語學校於テ本十月定期試業ノ後英佛獨逸魯支那語學脩業志願ノ者八年齡十三歳以上十八歳ヲ限り試験ノ上入學差許候條來三月五日限り同校へ可願出此旨布達候事」『文部省第二年報』附録「明治7年布達書」復刻再版、宣文堂、1966、1頁。
- (15) 宮部金吾博士記念出版刊行会編・発行『宮部金吾』1953、26頁。
- (16) 東京外国語学校編、前掲書、62頁。
- (17) 前掲、58頁。ここに新渡戸の名前がないのは奇異であるが、「学費滞納によるもの」という（新渡戸稲造『新渡戸稲造全集 別巻』「月報24」、教文館、1987、2頁）。
- (18) 『文部省第一年報』、前掲書、168頁。
- (19) メーチニコフ著、前掲書、273-274頁。メーチニコフは、1874（明治7）年から足かけ2年、日本に滞在し、開設されたばかりの東京外国語学校魯語科で教鞭をとったいわゆるお雇い外国人である（前掲、5頁）。
- (20) 東京外国語学校編、前掲書、58頁。
- (21) 野中正孝編著『東京外国語学校史-外国語を学んだ人たち』不二出版、2008、29頁。

- (22) 「文部省第二年報統計表」『文部省第二年報』, 前掲書, 9-13頁。明治8年1月から12月までの統計。
- (23) 『文部省第一年報』, 前掲書, 163-168頁。
- (24) 『文部省第二年報』, 前掲書, 418頁。
- (25) 「第一大学区東京府下ニ東京英語学校設立候條此旨布達候事」〔布達書, 第二十九号, 十二月廿七日〕, 前掲, 13-14頁。
- (26) 「文部省第二年報統計表」『文部省第二年報』, 前掲書, 9頁。
- (27) 『文部省第二年報』, 前掲, 421頁。
- (28) 岩崎行親編, 前掲書, 3頁。
- (29) 新渡戸稲造『新渡戸稲造全集 別巻』〔月報24〕, 教文館, 1987, 2頁。
- (30) 『文部省第四年報 第一冊』復刻再版, 宣文堂, 1965, 357-358頁。
- (31) 『文部省第三年報 第一冊』復刻再版, 宣文堂, 1964, 560-564頁。
- (32) その理由は、「下等語学だけで専門学校に進学出来るのに、わざわざ上等語学までやろうという専門学校進学希望者は少ないから、やがて、東京英語学校時代になると、事実上上等語学課程が消滅してしまうことになる。」(太田雄三『英語と日本人』講談社, 1995, 86頁)ということにあったようである。
- (33) 宮部金吾博士記念出版刊行会編, 前掲書, 27頁。
- (34) 前掲, 28頁。
- (35) 前掲, 27頁。
- (36) 前掲。
- (37) 1875年については『文部省第三年報 第一冊』, 前掲書, 566頁, 1876年については『文部省第四年報 第一冊』, 前掲書, 358頁, 412頁。
- (38) 「岩崎行親君と私」内村鑑三『内村鑑三全集・30』岩波書店, 1983, 205頁。
- (39) 東京英語学校のスコットは, 1875(明治8)年に下等第一級生徒4人, 第二級生徒 26人を受け持っている。『文部省第三年報 第一冊』, 前掲書, 565頁。
- (40) 「スコット メソッドの復活と浦口君のグループ メソッド」内村鑑三, 前掲書, 550-552頁。
- (41) 前掲。
- (42) 新渡戸稲造『新渡戸稲造「幼き日の思い出／他」』, 前掲書, 62頁。なお, 新渡戸の英語学校時代の思い出の箇所に, 「学生時代を経て何年も後, 私はある重要な地方の知事になった昔の級友に会った。私は彼に, 大学で研究した農学が彼の職業に役立ったかどうか尋ねた。彼は「あまり役に立たぬ。しかし英国の偉大な文筆家の文章が, 私の受けた教育の中で最も役に立つものとなった」とのべた。」とあるが, ここに言う昔の級友は岩崎の可能性がある。『新渡戸稲造「幼き日の思い出／他」』, 前掲書, 61頁。
- (43) 太田雄三, 前掲書, 75頁。
- (44) 前掲, 331頁。
- (45) 宮部金吾博士記念出版刊行会編, 前掲書, 32頁。
- (46) 大島正健著大島正満・大島智夫補訂『クラーク博士とその弟子たち』新地書房, 1991, 81頁。

- (47) 宮部金吾博士記念出版刊行会編, 前掲書, 33頁。
- (48) 岩崎行親著・発行『神道論』1927, 23頁。
- (49) 前掲, 24頁。なお同旨, 岩崎行親編, 前掲書, 3頁。
- (50) 「余の従事しつゝある社会改良事業」内村鑑三『内村鑑三全集・9』岩波書店, 1981, 472頁。
- (51) 新渡戸稲造『新渡戸稲造「幼き日の思い出／他」』, 前掲書, 65頁。
- (52) 前掲, 68頁
- (53) 前掲, 66頁。
- (54) 前掲, 68頁。
- (55) 「余の従事しつゝある社会改良事業」内村鑑三, 前掲書, 473頁。
- (56) 岩崎行親, 前掲書, 24頁。
- (57) 新渡戸稲造『新渡戸稲造「幼き日の思い出／他」』, 前掲書, 64頁。
- (58) 横山芳介作詩「北海道大学予科寮歌」(明治45年, 1912年)『日本歌唱集』中央公論社, 1974, 130頁。
- (59) 宮部金吾博士記念出版刊行会編, 前掲書, 35-36頁。
- (60) 「岩崎行親君と私」内村鑑三, 前掲書, 205頁。

(本稿は鹿児島純心女子短期大学図書館から多大なご支援をいただいて成った。付記して感謝申し上げる)